

令和2年度都民と農総研の意見交換会

令和3年2月4日(木)に「令和2年度都民と農総研の意見交換会」をオンライン開催し、都民や事業者ニーズに的確に応える研究推進の参考とするため、食と農の第一線でご活躍する5名の都民の皆様から、未来の東京農業の方向や試験研究への期待などについてご意見ご提言をいただきました。

テーマ

「都民が考える未来の東京農業～都民のライフスタイルの変化に対応する試験研究とは～」



右上から時計回りに出席者を紹介します。
伊藤彰一さん(調布市農業者)
山口浩二さん(株)シュクレイ企画開発部部长
安田弘貴さん(西東京市農業者)
小野 淳さん(株)農天気代表取締役
永戸早苗さん(一社)ブランディング協会理事
村上ゆり子(農総研所長、進行役)

1 ご活躍の場面で、生活や活動がどのように変わってきていると感じますか？

〔コロナ禍の影響〕

- 農家間の交流がなくなってきている。
- 消費者の農業に対する考え方が、農地を残していこう、農業と触れ合いたい、というプラスのものに変わってきていて、収穫体験などの需要が伸びている。
- 消費者はどう調理したら美味しくなるのかなど、野菜そのものに対する興味が増えている。
- 体験農園では、旅行など遠くに行けない学生が参加することが多くなった。

〔気候変動の影響〕

- 夏の暑い時期に野菜を植え付けて栽培するのが難しくなっている。
- 気候が不安定で、栽培が上手くいく年と上手くいかない年があり、非常に困っている。
- 体験農園では生産性を追求していないので、上手く育たなかったことも学びの機会にしている。
- 農業に関する情報量が多くなってきて、気象条件によって作れない農産物があるなど、消費者が理解するようになってきている。
- 加工品の場合、原料の価格が高騰していたら希少価値として売っていくなど状況を生かしている。

2 食と農の第一線にいらっしゃる状況を踏まえて、東京農業がどうあるべきと考えますか？

〔東京農業のPR〕

- 東京で農に関わる者は、都市農業を世界に発信した方がいい。大都市の中に農地が残って多様な農業が営まれていること自体、非常に価値が高い。東京では農地と近距離に都市的空間があって消費されており、地産地消では非常に恵まれた環境にある。
- 東京で良いものが作られていることをもっとアピールしたい。
- 東京産の農産物を使わせていただく際に、生産者の方とお話しをさせていただきながらご苦労や良さを伝えられるブランディングをしていきたい。

〔東京農業の可能性〕

- 人材確保が難しいスタートアップ（新たなビジネスモデルを開発する企業）に東京の農地で実証実験をしていただけたらいいのではないかと。
- 果実以外のものでも、どんなものがあるか、どんな特徴があるか教えていただければ、それに合う加工も考えていきたい。

3 農総研の試験研究への期待について

〔東京独自品種の開発〕

- 少子高齢化でだんだん消費が小さくなっていく中で、海外からでもわざわざ東京に来て食べたいようなものがあつた方がいいと思う。
- 収穫体験でその場でしか食べられないようなものが開発されるとよい。

〔先端農業の研究〕

- 初期投資をかけて生産性を上げるというのではなく、庭先販売所での盗難防止や体験農園のガイドなど普通の生活の困りごとが解決されるような技術開発があると非常によい。
- 消費者にとってのスマート農業のメリットの視点が欠けている。消費者にとってのメリットを謳えるとブランディング、アピールポイントになる。
- 直売所の防犯システムとか東京でしか使わないニッチな分野の研究と、世界を見据えた産業としてのスマート農業の研究をしてほしい。後者については、スタートアップに農総研の圃場でハウスの収穫作業をやらせてあげてはどうか。
- ハウスが自動で折りたたみたり錆びにくい材質だったり、機能がもっと増えるとよい。収穫用ロボットが傾斜地などでも使うことができればスマート農業に足を踏み入れられると思う。
- 農業者が減っていく中で、国や自治体が組んでスマート農業を進めてほしい。
- スマート農業推進室は先進的な取り組みをしていて楽しみである。部署の垣根無く連携を図って現場の課題を解決していただきたい。

〔研究成果の公表〕

- もっと具体的に農薬の残留性や安全性などを周知してほしい。
- 知りたい人に研究成果が確実に届いてほしい。
- 農総研の持っている敷地や施設などの資源の活用について、どんな条件で利用可能かPRして欲しい。

4 農総研より

- コロナを契機に、農産物を食べるだけでなく体験などで身近に農業を感じてもらえるようになった。農総研も今年度はできなかったがイベントなどで農業体験ができるように工夫していきたい。
- 東京の生産物には非常に新鮮で味の良いものを消費者に届けられる大きなメリットがある。「お隣は農地です」みたいな感じでブランディングしていただくと東京農業全体が盛り上がる。
- 昨秋、農総研では東京型スマート農業研究開発プラットフォームを立ち上げた。スタートアップの実証試験については、プラットフォームの中で契約を結んだり、共同研究で試験するなどしていければと思う。
- これからも、東京独自のもの、他にはない特徴を持った品種を作っていきたい。
- 東京型のスマート農業、非常に狭いところでも回転を良くして単価を上げて稼ぐ農業をしてくためにICTの技術を使っていく。気候変動にも対応できるように制御をある程度自動でできるようにスマート化を進めていきたい。消費者にとってのスマート農業のメリットについては今後さらに考えていきたい。
- スマート農業推進室はこれからも各科と連携しながら研究を進めていく。私たちが思いつかないような課題について、いろいろな方からのご提案をいただいて課題化していけたらと考えている。
- 農総研では都内産農産物の残留農薬の検証を行っているので、その成果を都民に伝えていきたい。
- 見学受入などをHPで工夫したい。農総研では毎年度末に研究成果発表会をやっているが、今年度はオンライン開催となるためご自宅で関心のある研究を見られるようになる。皆様からいろいろな意見をいただきながら、この機会に成果の出し方を工夫していきたい。